
【詩集】かんりん

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【詩集】かんりん

【ZPDF】

Z2167Y

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】

布袋しぐれの詩集、第一弾、『かんりん』

作品名は生まれの季語から頂きました。

感じのままに

広がつてゆく

世界

空の風

ぞうぞうと
新たな歩みを
始めよと
風が鳴く
空が歌う
そうして
揺られる葉が
私に問いかける

お前はどこへ行きたいのか
お前はなになりたいのか

そう問われて
私は少し躊躇して
きつと
自信を持つて
答えた
少し小さな声にならない
声で

私は私の野望を果たしたい
抱いていた夢を叶えたい

時はきたり

チャンスもなにもかも

我が手中にあり

何も恐れることはな

きつと

憂つこともない

このまま突き進めばい

私らしく

力強く

歩み続けることを

恐れるなど

私はそう

いわれた氣がするのだ

からだ

今日のからだは好きだな
ここのは厚さが気に入らないな
でもこの部分のこの触り心地は好きかも

毎日のようこ

鏡の前で

自分のウエストと格闘する

モデルみたいに

薄いウエストじゃないし

アイドルみたいに

キレイにくびれてる

ウエストじゃないから

憧れは強い

自制心はチョット弱め

意識は強いけれど

憧れは時々

チョット弱め

こここの感じ好きじゃない
あんまり揺れてて形が悪い
気に入らないな

毎日のように
見下ろして
他人と比べる脚

最近流行りの歌手みたいに
ほつそり素敵な脚じゃない
今頃の人みたいに長めな
人形美脚でもない

思いは強くて
憧れも強くて
理想は高めな
わがままな
私にひつつく
現実ボディ
これはこれでいい
そう思える日がくるのだろうか

充実感

疲れて
疲労もたまつて
いっぱい
だらしなく
だらつとしたくなるくらい
起き上がりたくなくなるくらい
それくらい疲れると
なんだか
満たされているなあって
そう感じる
最近
そう思つよつになつた

歳を重ねてきたせいなのか
どうだか分からないうが
満たされた感じが味わえるといつのは
実に幸せだと思える

痛い
疲れた
辛い
忙しい
混沌と
日々の生活で
虚しさも

そういう

全て乗り越えられれば

それが充実感にやがて変わることを

私は知つていいつもり

幸せ

これは幸せ

そしてこれは充実感

きっと満たされている証拠だつて

私は分かる気がする

ふと

短い

その一瞬
その瞬間

いつときだけ

短いそのときだけ

不意に

寂しさに駆られて

ひとりだと

痛いほど

この胸に刺さる言葉がある

届きませんか

届けられませんか

届かなくてもいい

眠つたままの想いでいい

あなたに向けた

その視線ひとつ

枯れることもなく

衰えることもない

ひかりを宿して

一夜限りの恋でも
いつそう
構わないと思った

私は誑たぶりかしたつもりはないのに

周りはそういう

愛がないと生きていけないのはきっと

皆同じはずなのに

私は道を踏み外したみたいに

思いもまるで一瞬で

軽いみたいに

そうじやない

一生懸命に愛しても

返つてこない感情なんて

ほしい反応がほしいだけで

ほしいものはほしい

まるで駄々こねる

赤子のようね

そういうわれても仕方ないから

私は思い焦がれた

理想の形の愛がほしくなるの

一夜限りでもいい

まるで女郎かなんかみたいに

軽い

安っぽい愛でも構わないと思つ

あなたが一瞬でも

私のために存在して

私だけを見て

私だけのために囁いてくれるのならば

声

聞きたい声がある
抱きしめてほしいくらい
聞いてみたい
偶像みたいな声がある

幻なのだろうか
文字のおこりから
あなたの声がするみたい

優しく深く響く声は
温かく
冷たく
そうして
ぼんやりと
染み渡る

あなたの声がすき
あなたの声が聞いてみたい
あなたはどんな声なの

形いっぱい
温かさも違つて

あ

恋も多い私だから

いつやって少しの破片にも

恋しけりやつさだらつね

あ

戀おしい

懐かしいみたいに

よく響く

恋しけりやつたんだらつね

あなたの

聞こえない

声

マイナス

やめたいなって

ふと思つ

そういう瞬間が

あつたりして

目の前のことに集中したいって
思つたりする

ああ

案外、ちつぽけだつたつて
ビウしょウもできないって

なんだるつ

あべこべだけれど

そう考えてしまつ瞬間がある

リセツトしたい

新しい自分に出てくわしてみたい

私は次のとき

ビウなるんだるつか

新しい刺激を求めるために

この瞬間を生きて

それはプラスに向つための
マイナスからの脱却
きっと
そう

マイナスは今のためにある
ブルーな気持ち
ただそれにすぎない

憂鬱

心が頭が
深いブルーに占められて
温かさも
何もかも
失っていくみたいに

これがマイナスの世界なんだろうな
ぼやつと
そう感じて

一生懸命であることが
少し
面倒になる

キリリ

空っぽだつた胃に
モノが流れ込む
加減もなく
たつぱりと

たぶつと

波打つ

胃の中

途端にキリリと痛み出す

優しくないな
この食べ物は

口に含むことを

少し躊躇する

食べたくない

胃が痛い

それだけだけれど

かなりの打撃

痛い 痛い

食事をしたことを後悔した

食事をしていないほうが

マシだと思った

胃のせり上がりとか

そういうのが辛い

どうして食べなくてはいけないの
どうして太ってしまうの

遺伝子の悩みって

一種

尽きなこといろいろがあると毎つ

何を食べても太る人と
何を食べても太らない人って
生きる道も違つてしまつ
苦しいものだなあ

生きるため

食べて

苦しむんだろうな

誰が正しいか
誰が良い人か
分からなくなつた
この時代に

清く正しく
真つ直ぐに
そう生きるだけが
術じやないと
悪人が詠うようだ

正しく生きれば
自分が損をするかもしれない
そういう世の中だから

騙すのも騙されるのも
ひとえに運命だと
そう悪人が言つようだ

正義を詠つたのは
いつの日か
正義だけが正しくないと
そう思えたのは

いつの日からか

正義を過信するな
そう言いたげなのは
悪人か善人か

正義は最早
英雄ではない

少なくとも人は
これからを
正義のみにかけて
生きれないという
搖ぎない
世の中の裏腹な事実に
苦しむのだろう

あなた一色

こんなに早く
掌返すように
感情も変わるなんて
思わなかつた
こんな自分
知らなかつた
私らしくもない
もうすっかり薄れた感覚
白く
清く
キレイでいること

思つていた以上に
私は汚れていて
頭の中で
必死に駆け引きして
振り向かせようと
まるで一生懸命
全てを賭けた様に
元の自分は全て押し殺して
何も
少しも
振り向かないあなたに苛立つて

いつからか

この感情が
単なる高鳴りと

期待と

憧れから

素直な恋心へ

相手にされないと

知つても

私は

諦められなかつたみたい

あなたの袖を握る

他の大人の女性が
羨ましかつた

きっと

大人をからかつてはいけないとか

そういうて

相手になんかしてくれないのでどうに

私の心も知らないで

あなたがどんどん

この頭を支配していく

お馬鹿ちゃん

あなたなんかに言われたくないよ
後ろ指差して余裕あるの

私があなたより

劣っているなんて

可笑しな話

馬鹿げた話

あなたのものむじで
はからないで

あなたの田はこれつぽっちも
正しくなんかないんだから

お馬鹿ちゃん

悲しいお馬鹿ちゃん

うぬぼれるなつて
どの口が吐いたの
うぬぼれているのは
寧ろあなたのほう
何者のつもりなの
可笑しな話
馬鹿げた話

侮辱する暇があったら
少しはその脳を鍛えてみてよ
あなたは馬鹿らしくって
嫌気もさすの

お馬鹿ちゃん

哀れなお馬鹿ちゃん

この私の人生は
この私のためだけにある
どう転がそうと
どう歩もうと
何人とも
邪魔なんて出来ない
自由でいいの
私らしくあつていいの

お馬鹿ちゃん

大きなお馬鹿ちゃん

邪魔なんてしないで下さる

微笑み

まるで

絵本の中の皇子様ね

あなたの微笑み

柔らかく

純粹で

大人のクセに
そう言いたくなるほど
温かい
笑い方している

どうせなら

そう言いたくなるほど
出会いの遅さ
少し悔やみたくなるの

いつそのこと
そう思わずにはいられないくらい
私の幼さ
悔やんではいるの

きっと子供だからって
きっといつものことだからって

あんまり相手にしてないでしょ

憧れの皇子様
こんな近くに
生きていたなんて
知らなかつた
想像できなかつた

絵本の中が現実になつて

私は少し
夢見てる
シンデレラみたいに
あなたの笑顔に
少しの間
癒されて

あなたと出会い
気付いた感情
もうきつと
笑顔が怖いだなんて
思わない

あなたが与えてくれた勇気を
もう持つていいから

あなたが私にくれたものは
とても大きな
素敵な感情

震える

魂が泣くみたいに
まるで赤子に戻ったかのよう

耳から伝う
伸びのある
きれいな音を
聴いていると
身体のどこかで
魂が鼓動する

ドクンドクン
ドクンドクン
温かな熱を持つて
全身にぱっと広がる
一種のエクスタシー

これぞ

本当の悦楽だと

歌声が

身体の中で跳ね返る

温かな意思をもった声は
まるで魔法のように
ぱあっと広がってゆく
馴染んでゆく

いつまでも耳に残るサウンド
幸せなサウンド
魂を抱く
そのサウンドが
鳴り響く限り
その震えはとまらない
とめられない

壁ちない

ちょっと突けば

墜ちるつて

ちょっと声をかければ
何でものつてくれるつて
勘違いしていない 君は

勘違いしないで
そんなに安くないわ
簡単じやないの

私を手に入れるまで
必要な マナーと言葉選び
時間をかけてゆっくり
この間の溝を解いてみて
簡単なことよ

多分

ちょっとと関係をもつて
おいしいとこだけ
ちょっと囁けられれば
あなたのものになるつて
勘違いしているでしょう

君も

勘違いしないで

誰でもいいわけじゃない

何度も言わせないで

私が誰に似てるって
馬鹿にしないでよ

愚弄しないで

私は私

似てるなんてあり得ない

誰でもなく

間違いなく

この私は私

私は私の作法を持つて
定理を持つて

人を選ぶ

仕掛けられたトラップに
はまり込むほど
馬鹿じやないわ

幸せ

人として認められたり
求められたり
それって些細なことの積み重ねだけれど
その些細なことが
ほんのわずか
色のない日常に
色を添える

素敵だと思えること
キレイだと感じれる心
それがあつて日常がやつと輝きだして
味気のない日々だけれど
そういう小さなことに
心動かされることから
始まつたりする

愛したり愛されたり
人間として大切なものを
味わえる日常にいれるから
随分幸せだと感じることもできる
満たされているってとても立派で
とても素敵なことなんだ

小さな事実に驚いて
それでいて
素敵だと気付く

小さなひとつひとつ
些細なひとつひとつに
心動けば
それだけで
幸せだと思えたら
最高だらう

#苦しき

痛こ苦しき
驚くほどび

自分でモ

どつしてこんなになつちやつたのか
分からないくらい

苦しき

胸の奥がとても痛いよ

今までにないくらい

どつしてこんなに苦しきのか

分からないけれど

そうやつて

誤解されることも

嘘で塗り固められていく

仮の私に嘆くのも

疲れだし

苦しいし

とてもいいことなんて
ありはしなかつたよ

どつして傷つけるの

勝手な想像でまとめてちゃ 一つの

苦しいのよ

逃れられない

こんな偶像から

私は逃げられないのに

酷い話ね

こうやって苦しめて

笑っているなんて

馬鹿にしないでよ

笑わないでよ

後ろ指なんて差さないで

本当の私は

嘘で塗り固めないと

立つてられない位

弱虫なんだから

しり込みしているんだから

そんな偶像をつぐらせた

私の隙が

今はただ

悔しいの

メール

も

普通の友達だけれど

やつぱり

あなたは

とても良い男ひとだなって

そう感じてる

いつも優しくて

少し前を

ゆっくり歩くみたいな

あなた

感じている

その優しさ

溢れんばかりに

あなたが母のように言われること

いい加減気付きなよ

優しすぎるほど

惚れっぽくなくなつても

一途じやなくつても

慎重に深く

大切に

人を愛する」と

あなたが半分教えていったこと
あなたがその手で
教えてくれたこと

あなたにフラれたこと
きつと後悔しないけれど
あなたの傍にそう
長くいられないことが

少し苦しいのよ

愛しているわけじゃないけれど

あなたという

素敵なひとりの男性に
寄りかかれないことが

少し苦しいだけよ

あなたに良く似た
優しい人に
少しばかり
今も惹かれて

来る
来ない
そんな返信を
少し心待ちにして

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167y/>

【詩集】かんりん

2011年11月24日17時57分発行